

1. 蔵垣内遺跡第11次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、亀岡園部線地方道路建設に先立ち、京都府土木建築部(現・建設交通部)の依頼を受けて、当調査研究センターが実施した。道路は、桂川下流に架かる保津橋から、千歳町運動公園付近で現在の府道に合流するルートが計画された。道路建設に伴う今回の調査対象地は、亀岡市千歳町国分内を南北に縦断する幅約8m・総延長約900mの範囲である。この範囲にかかる遺跡は、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である蔵垣内遺跡と、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期後半から飛鳥時代中頃にかけて形成された国分古墳群である。

調査を実施するにあたって、便宜上、調査対象地を南から北へA～Lの12地区に分けた。また、諸条件により数回に分けて調査した地区については、地区名-数字で表記した。

今回の調査は、A・D-1・E-1・G地区で実施した。この範囲にかかる遺跡は、蔵垣内遺跡である。当遺跡は、東西1,000m・南北1,250mの範囲で広がり、国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、平成16～18年度に隣接地の発掘調査が行われ、その詳細が明らかになりつつある。

発掘調査は、当調査研究センター調査第2課第1係長小池寛・専門調査員岡崎研一・調査員筒井崇史が担当した。調査面積は、約2,480㎡である。発掘調査を行うにあたり使用した座標は、世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

本報告の執筆は、岡崎のほか、縄文土器については乾茂年(奈良大学学生)が行った。文責については各項の末尾に記した。

現地作業を実施するにあたり、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会をはじめとする関係諸機関の協力を得、また地元自治会・地権者・地元住民の方々のご理解とご協力を頂いた。^(注1)記して謝意を表す。なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部(現・建設交通部)が負担した。



第1図 調査地周辺主要遺跡分布図
(1/50,000「亀岡市遺跡地図」を改変)

2. 位置と環境

亀岡盆地は、京都市が所在する京都盆地の北西に隣接し、盆地中央を桂川が南流する。桂川東岸地域では、桂川に並行する形で馬路町から保津町にかけて、低位段丘が続く。この段丘上に数多くの遺跡が存在する。ここ数年続いた国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴う発掘調査によって、多くのことが明らかになりつつある。

以下、桂川東岸地域の主要遺跡を概観する(第1図)。

縄文時代の遺跡としては、早期の土器が出土した案察使遺跡、後期の土器が出土した車塚遺跡がある。いずれも包含層出土遺物である。晩期の土器棺が、大淵遺跡で検出されている。

弥生時代の遺跡としては、前期の竪穴式住居跡を検出した大淵遺跡や、土壙墓を検出した池尻遺跡がある。中期前半の遺跡には、方形周溝墓が検出された池尻遺跡がある。南丹波地域を代表する古い段階の方形周溝墓群である。続く中期後半には、馬路遺跡・時塚遺跡や車塚遺跡で方形周溝墓が営まれるようになる。時塚遺跡では円形や方形の竪穴式住居跡も検出され、集落域と墓域が共存することが明らかとなり、南丹地域の弥生時代中期の集落の様相が明らかとなった。後期の遺跡としては、蔵垣内遺跡や馬路遺跡から竪穴式住居跡が、池尻遺跡から方形周溝墓が見つかっている。

古墳時代の集落遺跡としては、蔵垣内遺跡、時塚遺跡や出雲遺跡などから竪穴式住居跡がみつかっている。前期古墳としては、向山古墳が知られるのみである。中期になると、中期後半に築造された坊主塚古墳や天神塚古墳が、亀岡市と南丹市の境付近に存在する。両古墳は、二段築成の方墳である。坊主塚古墳は、造出しと二重周濠をもち、仿製神獸鏡や武具などが副葬されていた。近年の発掘調査で新たに発見した時塚古墳群は、中期後半から後期前半に築造された古墳である。特に1号墳は、埴輪・葺石をもつ首長墓の1基と考えられ、盾持ち人形埴輪をはじめ、武器、馬具や農具などが副葬されていた。後期になると、前方後円墳が築造される。後期初頭に築造された保津車塚古墳(案察使1号墳)は、全長53mを測り、二重周濠をもち、二段築成の墳丘には葺石を施し、石見型木製品を立てる。後期前半に築造された千歳車塚古墳は、三段築成の墳丘と二重周濠をもち、丹波地域を代表する盟主墳と考えられている。

古墳時代後期後半から飛鳥時代前半にかけて、数多くの横穴式石室を内部主体とする古墳が築かれるようになる。蔵垣内遺跡北部に所在する国分古墳群もこの時期のものであり、最近の発掘調査によって横穴式石室が27基以上確認され、その総数が激増したところである。中でも、国分45号墳は八角形を呈す。このような多角形墳は、天皇陵や官人層の墓に採用されるが、近年地方における調査事例から、飛鳥時代にみられる墳丘装飾の例として、多角形にめぐらせる列石が報告されている。45号墳も墳形に八角形を採り入れており、中央と関連した有力者の墓と位置づけられている。

飛鳥時代には、池尻遺跡から馬路遺跡にまで及ぶ灌漑用水路と竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が営まれるようになる。その他に蔵垣内遺跡や河原尻遺跡においても住居跡が認められた。この時期に、かなり広範囲にわたって大規模な水田開発と集落の形成がなされたようである。

奈良時代には、亀岡市域は丹波国に含まれる。池尻遺跡から柵や溝によって囲まれた区画内に、計画的に配置する大型の掘立柱建物跡群がみつかった。官衙的な様相の濃い建物群とされ、出土遺物から奈良時代前半の短期間で廃絶した丹波国府関連の施設群とも考えられている。中頃には各地に国分寺・国分尼寺が建立される。蔵垣内遺跡に隣接する段丘縁辺部に国分寺と国分尼寺が存在する。三日市遺跡では、国分寺創建時の瓦を焼成し、水運を利用して国分寺まで運んでいたようである。また奈良時代の山陰道は、国分寺・国分尼寺から池尻遺跡の官衙的な施設にかけて、段丘に沿う形で存在したとする説が有力とされている。しかし、山陰道に関連する遺構の検出には至っていない。

平安時代の遺跡は、馬路遺跡から掘立柱建物跡がみつかった。この中に総柱建物もあり、倉庫群が存在した可能性がある。

中世になると、蔵垣内遺跡から掘立柱建物跡や土坑などがみつき、中世後期の丹波国分寺に関連する遺構と考えられた。これは、在地領主層の居館もしくは寺院関係の施設である子院と思われる^(注2)。

次に、農地整備事業に伴う発掘調査によって明らかになった蔵垣内遺跡内での各時期の遺構の広がりを概観する(第2図)。ここに記す地区名は、今回の第11次調査時に設定したものである。

E・D地区付近では、縄文土器が包含層から出土した。L・M地区付近から弥生時代後期の竪穴式住居跡がみつき、この付近に後期の集落が展開する。G・E地区の東側には古墳時代前期の竪穴式住居跡がみつき、この時期には遺跡南東部の府道沿いに集落が営まれるようになる。古墳時代後期後半から飛鳥時代前半にかけては、J～M地区付近にかけて、古墳が築かれるようになる。また、飛鳥時代から奈良時代初頭にはC～G地区付近にかけて竪穴式住居跡が展開する。続く奈良時代中頃になると国分寺・国分尼寺が建立され、C・D地区付近に奈良時代の遺構が存在する。国分寺南東約400m付近のC地区付近からは正方位の建物群がみつき、官衙的な施設であると考えられた。平安時代の遺構は希薄であり、当時の様相については不明な点が多い。中世になると、I地区西側に遺構が集中することから、この付近に中世国分寺に関連する子院などの施設が存在すると考えられている。

今回の調査地は、段丘縁辺部のA地区とD～G地区間にあたることから、縄文土器を包含する層が一部かかり、飛鳥時代から奈良時代にかけての集落跡などを検出することが予想された。

3. 調査概要

(1) A地区(第2～4図)

この地区はC地区南側の段丘中段域にあたり、C地区より約6m低い。C地区付近では、農地整備事業に伴う発掘調査で竪穴式住居跡や掘立柱建物跡を多数認めている。調査開始前は50cmほどの段差が連続する段々地形を呈しており、その南側は段丘崖となることから、遺構はさほど遺存していないと考えられた。調査対象地に、遺構の有無を確認するための試掘トレンチを3か所設定し掘削した。その結果、段々地形は後世のもので、南に向かって緩やかに下がる地形が認

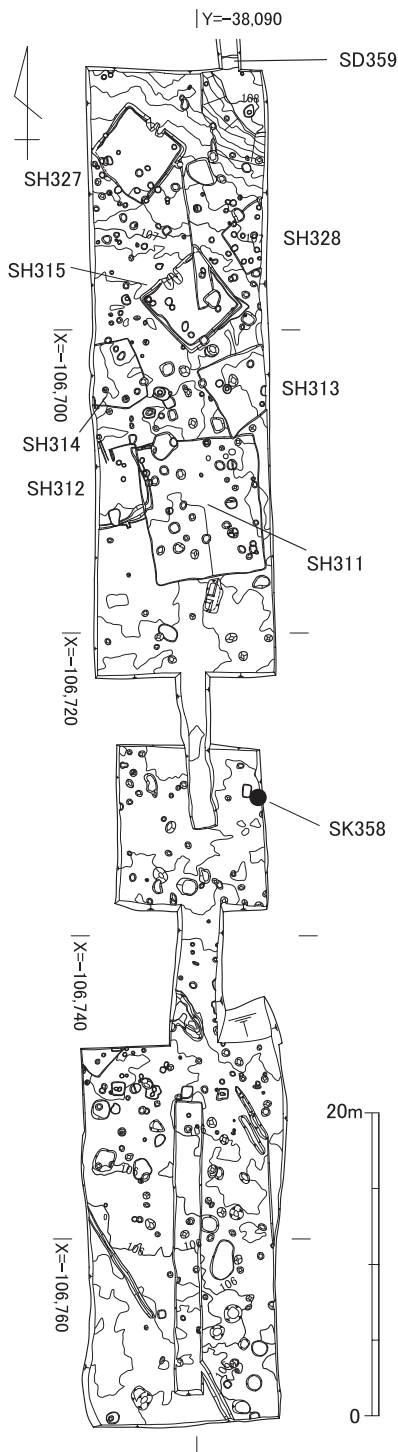


第2図 調査トレンチ配置図

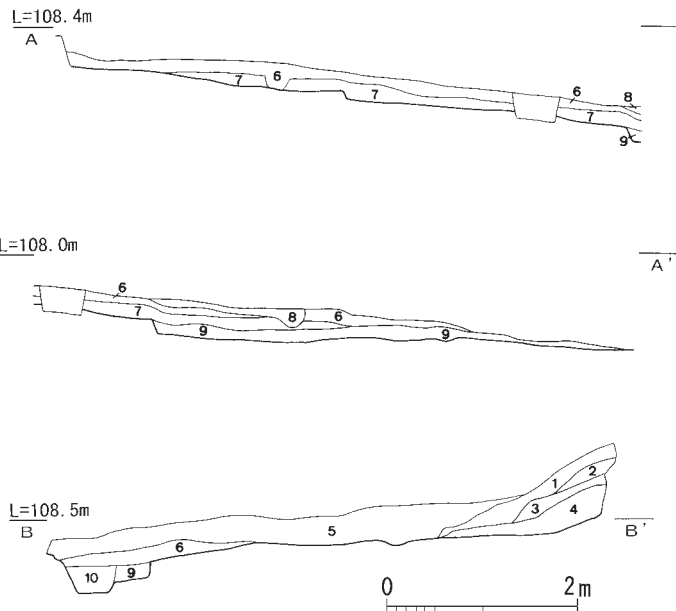
められ、この傾斜面を掘り込む形で竪穴式住居跡の一部と柱穴などを検出した。この結果を踏まえて、段丘中段の路線部分全域を拡張した。A地区北端は、暗茶褐色土や濃茶褐色土の遺物包含層が約30cm堆積しており、包含層上位に赤色焼土が径約30cmの範囲で見られる所もあった。焼土に伴う明確な土色の違いは認められなかったが、住居跡などの遺構が、包含層を切る形で存在した可能性が高いと思われた。SH315付近から南側は、遺物包含層は認められなかった。今回検出した遺構は、包含層下位あるいは地山面を掘り込む形で検出した遺構で、土器棺1基・竪穴式住居跡7基・柵列1条・溝1条・土坑2基・柱穴群などである。またC地区との比高差が約6mあることから、どのあたりで急斜面になるか旧地形観察のための試掘トレンチをA地区北端に設定し掘削した。A地区北端から北方4m付近から約30°の傾斜で段丘が存在することがわかった(第4図B-B')。

1) 弥生時代 この時代の遺構は、土坑SK358である。

土坑SK358(第5図) A地区中央付近から検出した。掘形は、東西0.44×南北0.37m、深さ約0.2mである。そこに弥生時代中期の甕(1)を横にし、甕の体部片(2)を蓋にした状



第3図 A地区遺構配置図



- | | | |
|-----------------------|----------|------------|
| 1. 礫混じり暗黄灰色土 | 4. 濃茶褐色土 | 8. 淡茶褐色土 |
| 2. 淡黄褐色砂礫 | 5. 暗灰色土 | 9. 茶褐色土 |
| 3. 淡茶褐色砂質土
(礫少量含む) | 6. 暗茶褐色土 | 10. 濃茶褐色礫土 |
| | 7. 濃茶褐色土 | |

第4図 A地区土層断面図

態で出土した土器棺である。中の土から、骨などは認められなかった。

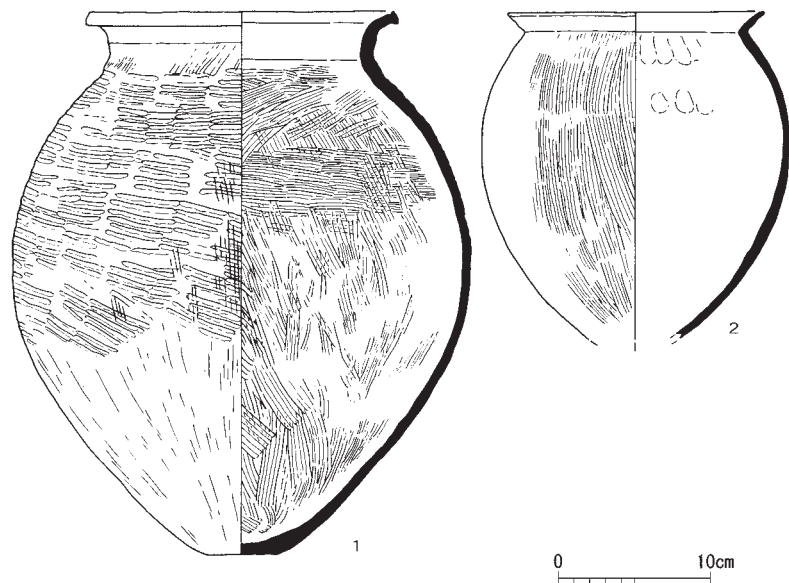
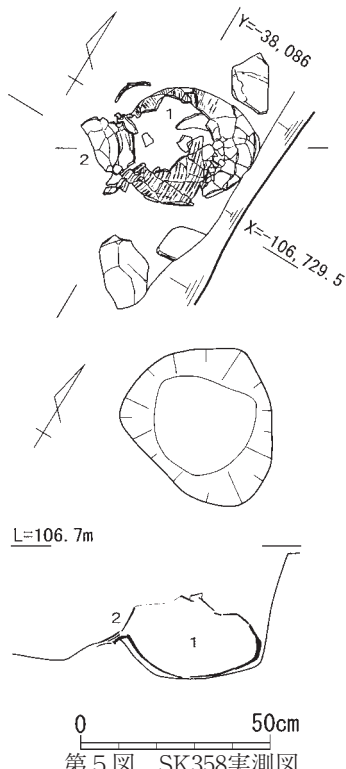
出土遺物(第6図) 1は、口縁部が緩やかに大きく外反する甕である。体部外面は上半が叩きのちハケ調整、下半はヘラ削りを施す。内面は体部上半部が斜めのハケ調整、中位は横方向のハケ調整、下半を縦方向のハケ調整を施す。2は、口縁部が大きく屈曲する甕である。体部外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ調整を施す。

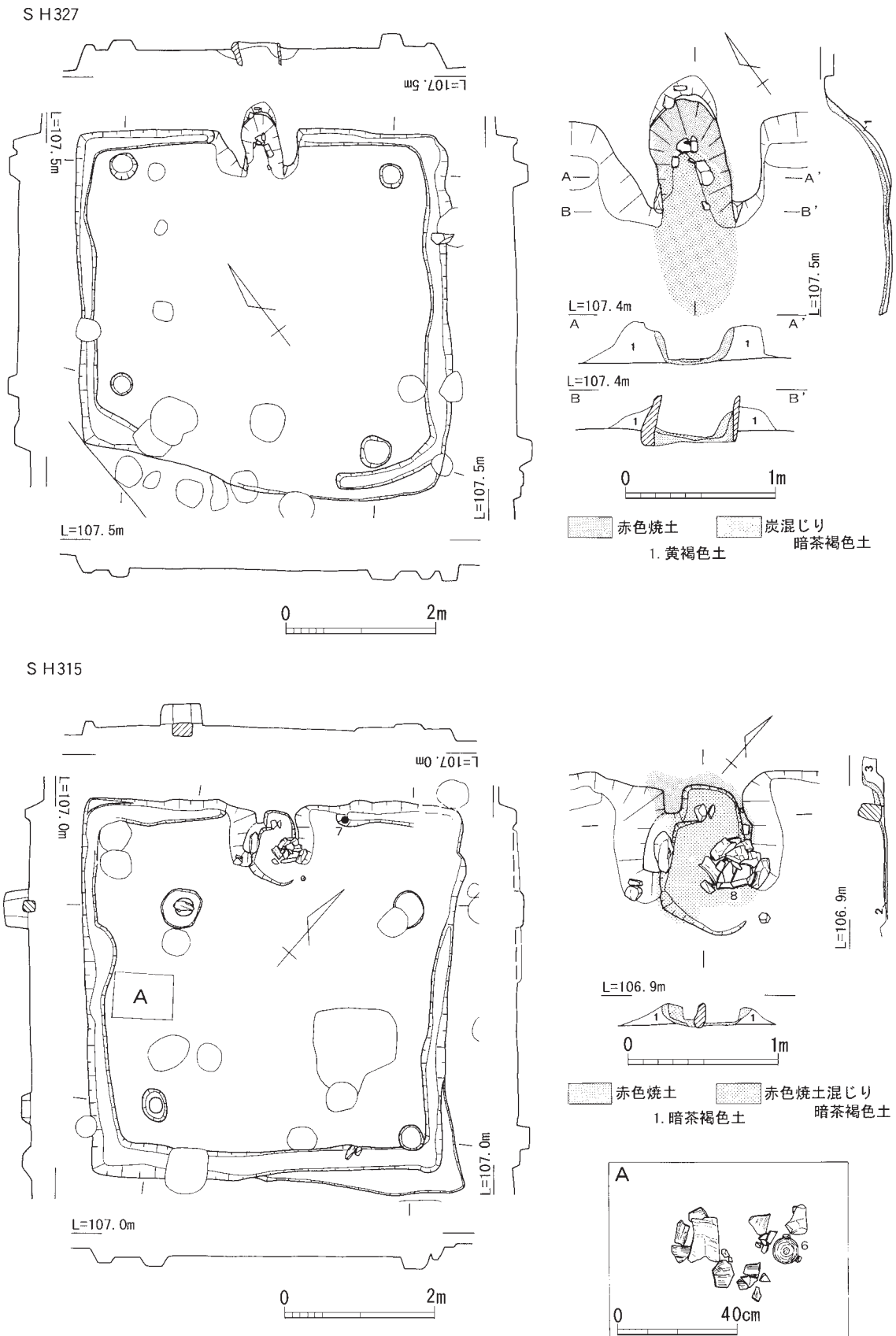
2) 飛鳥時代 この時期の遺構は、竪穴式住居跡S H327・315の2基である。

竪穴式住居跡S H327(第7図) A地区北端で検出した住居跡である。その規模は、5.0×5.0m、深さ約0.2m、N37°Eを測る。北東辺中央に竈が付く。竈の規模は、長さ1.0m、幅1.1mを測る。両袖部の内法は、約0.4mである。南西辺中央付近を除いて、周壁溝がめぐる。周壁溝の途切れる所が住居への出入り口であったと思われる。周壁溝の規模は、幅約30cm、深さ約10cmである。支柱穴は、各コーナー周壁溝寄りに設けられ、径約30cm、深さ約20cmを測る。住居内埋土中から須恵器杯蓋(4)・杯身(5)・甕の体部片が出土した。

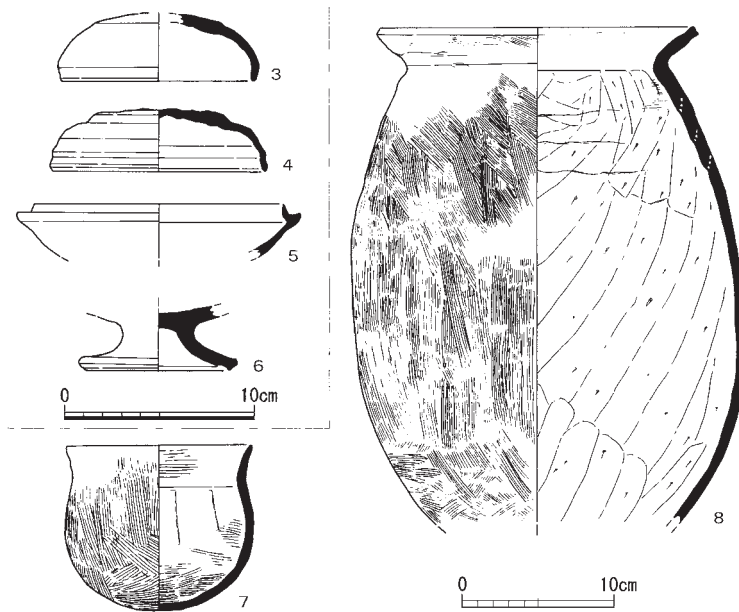
竪穴式住居跡S H315(第7図) A地区北側で検出した住居跡である。試掘調査で住居跡の一部を確認した。住居の規模は、5.0×5.1m、深さ約0.2m、N42°Wを測る。北西辺中央に竈が付く。竈の規模は、長さ0.8m、幅1.1mを測る。両袖部の内法は、約0.4mである。竈付近を除いて幅40cm、深さ約20cmの周壁溝がめぐる。支柱穴は南の2か所はコーナー周壁溝寄りに、北の2か所は中央寄りに設けられ、径約30cm、深さ約20cmを測る。竈内から土師器甕(8)、竈右側の周壁溝付近から土師器壺(7)、南西辺中央付近の床面から土師器片とともに須恵器脚(6)、埋土中から須恵器杯蓋(3)が出土した。

出土遺物(第8図) 3・4は、杯H蓋である。天井部はヘラキリ後簡単なナデ調整する。5は、





第 7 図 SH327・315実測図



第8図 出土遺物実測図(2)

杯Hである。底部は欠損しており不明である。口縁部は内上方に短く立ち上がる。3～5は飛鳥時代中頃に位置づけられる。6は、高杯の脚部である。短脚で端部は下方に尖る。7は、土師器甕である。体部内外面はハケ調整を、口縁部内面は、横方向のハケ調整を施す。8は、長胴の甕である。体部外面は縦方向のハケ調整、内面はヘラ削りを施す。

3) 時期不明 出土遺物がな

く時期決定には至らなかった遺構は、竪穴式住居跡S H311～314・328の5基である。

竪穴式住居跡S H328(第9図上) A地区北側で検出した住居跡である。その規模は、3.5×3.5m、深さ約0.05m、N36°Wを測る。非常に残りが悪く、東半分は調査地外になるため、その全容については不明である。支柱穴は、コーナー寄りから3か所で検出した。その規模は、径約30cm、深さ約10cmを測る。竈や周壁溝は認められなかった。出土遺物はないが、S H327と主軸がほぼ平行するから、同時期の住居の可能性がある。

竪穴式住居跡S H314(第9図中) A地区北側で検出した住居跡である。その規模は、4.0×4.0m以上、深さ約0.1m、N19°Wを測る。非常に残りが悪く、西側が調査地外になるため、全容については不明である。支柱穴は、コーナー寄りから3か所で検出した。その規模は、径約30cm、深さ10～20cmを測る。竈や周壁溝は認められなかった。

竪穴式住居跡S H313(第9図下) A地区北側で検出した住居跡である。その規模は、4.6×5.0m、深さ約0.1m、N28°Wを測る。住居の東側が調査地外になるため、全容については不明である。支柱穴はコーナー付近から3か所で検出した。規模は、径約30cm、深さ約10cmを測る。竈や周壁溝は認められなかった。

竪穴式住居跡S H312(第10図上) A地区北側で検出し、S H311に切られた状態で検出した。住居の規模は、5.0×4.0m以上、深さ約0.05m、N15°Wを測る。住居の西側が調査地外になるため、全容については不明である。北辺中央から竈を検出した。S H327・315で検出した竈のように、内側が赤色に焼けているという状況でなく、竈内に炭がわずかに混入していた。竈の規模は、長さ1.6m、幅0.8mを測る。両袖部の内法は、約0.3mである。住居の外まで煙道部は延びていた。竈の遺存状態は悪かったが、煙道部の状況がわかるものであった。東・南辺には、幅約0.3m、深さ約0.1mを測る周壁溝がめぐる。南東コーナー付近のみ、その幅が0.8mと広い。支柱穴はコーナー付近から2か所で検出した。規模は、径30～40cm、深さ約10cmを測る。

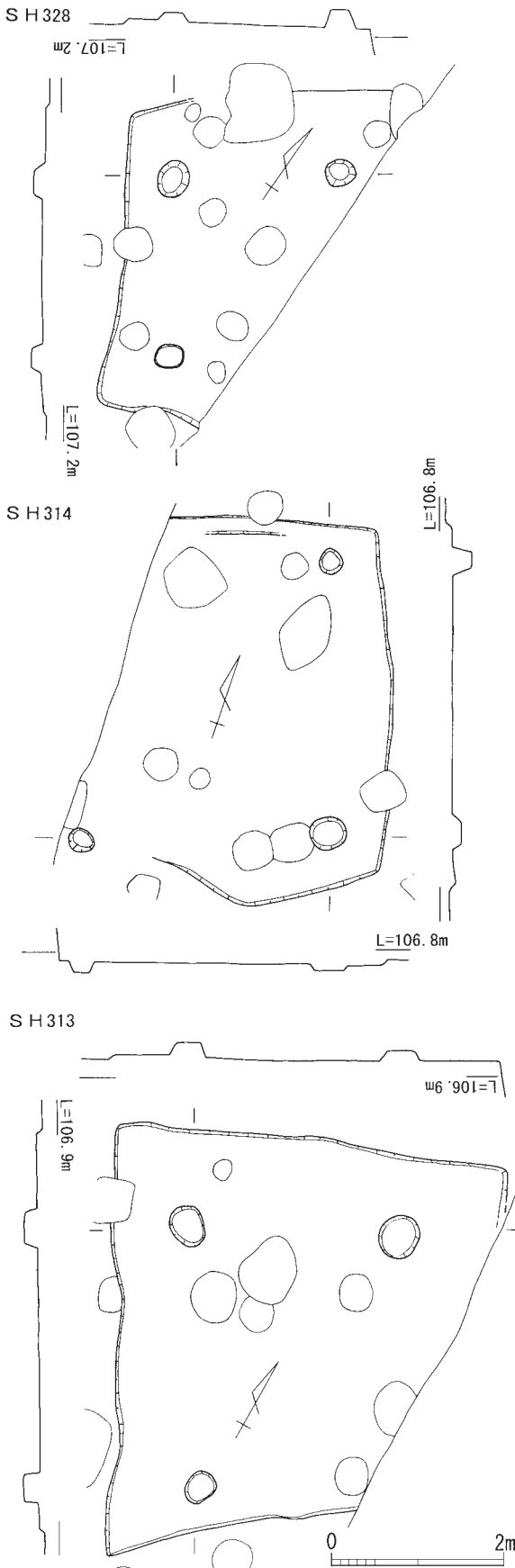
竪穴式住居跡SH311(第10図下) A地区北側で検出した住居跡である。その規模は、8.0×9.2m、深さ約0.1m、N6°Wを測る。非常に残りが悪く、南北方向に長い住居であった。今回検出した住居の中で最も大きく、竈や周壁溝は認められなかった。主柱穴は、6か所で認められた。規模は、掘形が0.4~0.8m、深さ約0.3mを測る。他の住居の主柱穴に比べて、大きい。柱痕跡は、径約0.2mである。一辺が3.5~5.0mを測る住居群の中に、この1基のみが数倍の占有面積をもつ。これは、集会する場など他の住居と性格の異なる施設であったためと思われる、この住居跡を中心に集落が展開することも考えられる。

溝SD359(第3図) A地区北側に設定した試掘トレンチから検出した、東西方向の溝である。全長約1mを確認した。幅約0.5m、深さ約0.3mを測り、埋土は濃茶褐色礫土である。竪穴式住居跡群北側の高位側から検出し、調査地内に溝の続きが認められなかったことから、B地区からの段丘裾に沿う形で築かれたと思われる。竪穴式住居跡群への雨水を防ぐための溝であったと考える。

柱穴群(第3図) 柱穴群のうち、遺物が出土したものはわずかであり、また出土遺物も破片であることから、時期決定には至っていない。竪穴式住居跡が埋まってからのものも含まれるため、飛鳥時代またそれ以降の柱穴が存在するものと判断される。A地区南側ほどその密度は希薄となる。

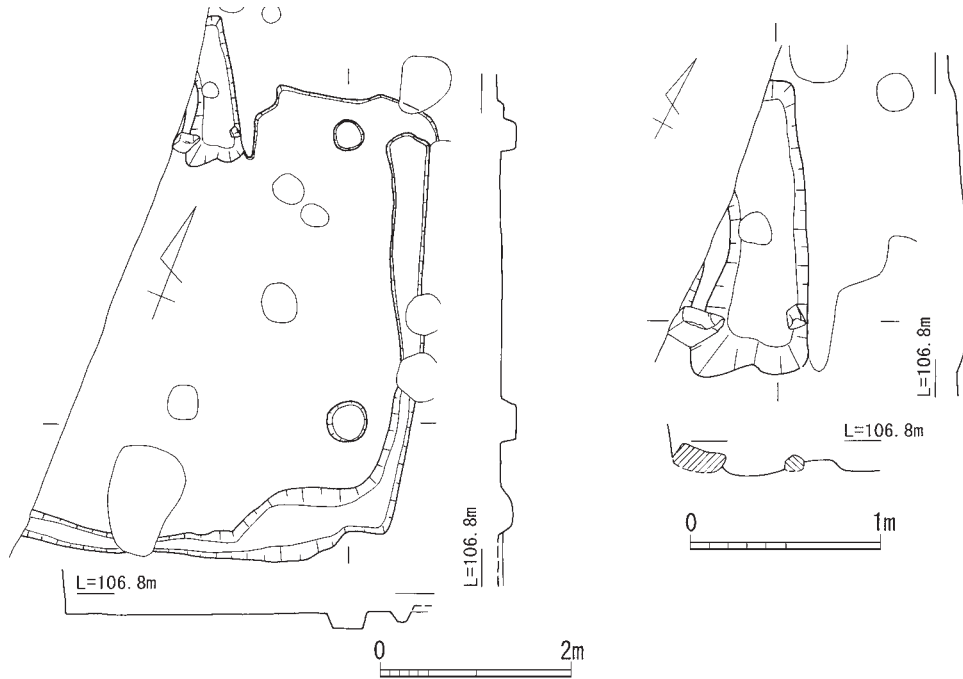
(2) D-1地区(第2・11図)

A地区から北方約110mの交差点付近をD地区とし、その北半部をD-1地区として調査した。この地区から検出した遺構は、方形周溝墓1基・土坑2基・竪穴式住居跡1基・掘立柱建

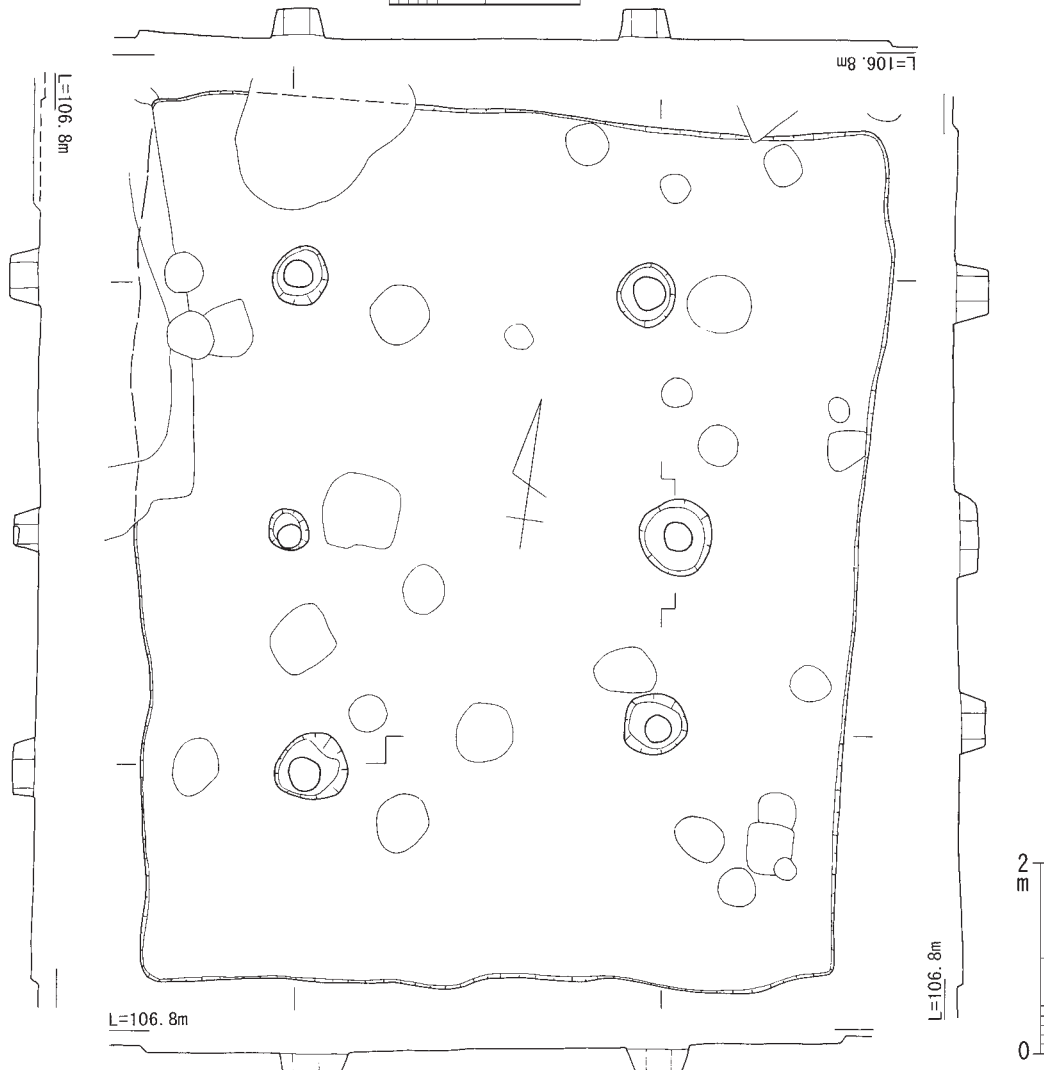


第9図 SH328・314・313実測図

S H312



S H311



第10図 SH312・311実測図

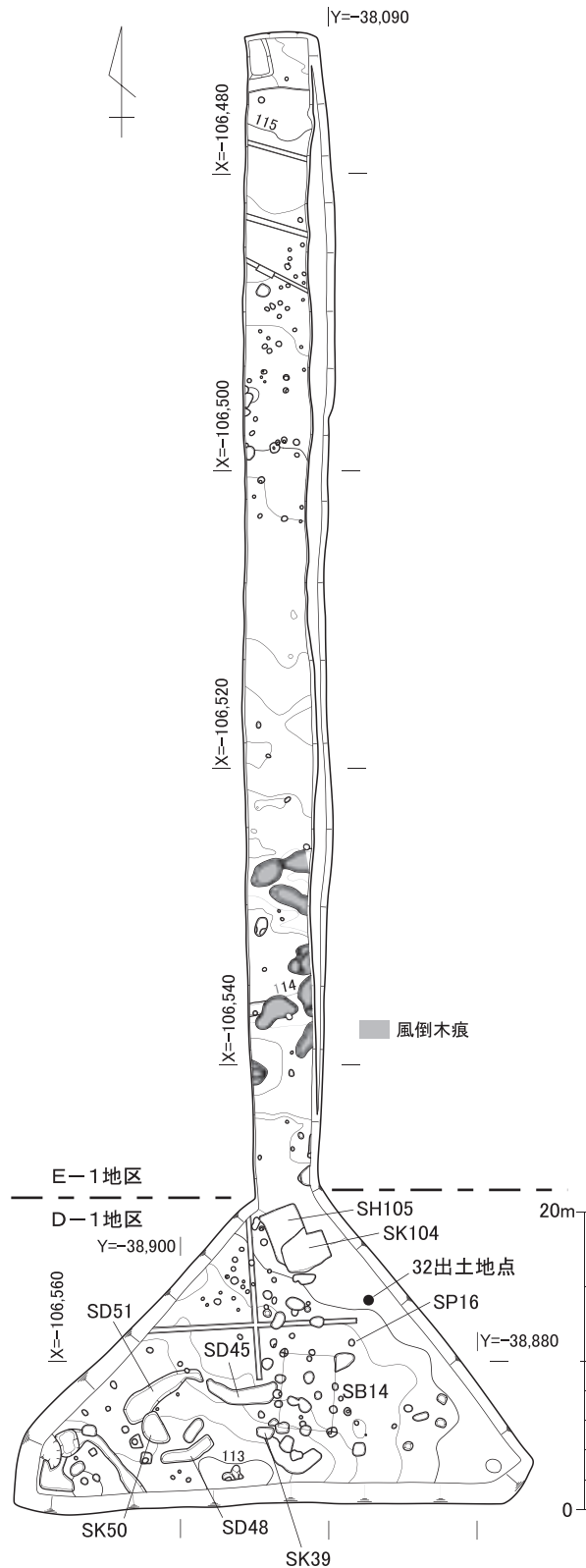
物跡1棟・柱穴群などを検出した。また、当地区北西部の整地層から縄文時代早期の土器や石器が出土した。

1) 弥生時代 この時期の遺構は、方形周溝墓S D45と土坑S K39である。

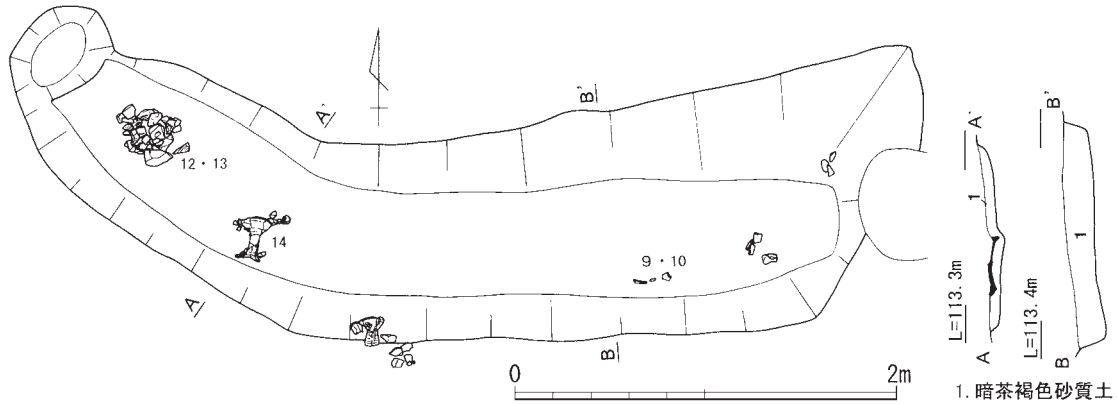
方形周溝墓S D45(第12図) 調査地中央から、長さ約4.8m、幅1.0~1.4m、深さ0.05~0.15mを測る溝を検出した。溝の底から弥生土器高杯・壺・鉢などが細片の状態出土した。非常に残りの悪い溝からの出土であったが、多くの弥生土器(第13図)を得ることができた。同市所在の時塚遺跡でみられた方形周溝墓群での遺物出土状況に類似することから、S D45も方形周溝墓周溝の一部と考えた。周溝墓の全容・規模については不明であるが、周溝がわずかに弧状をなすことから、南を画する溝であると思われる。また、同様の溝が西側にもみられることから、この付近に数基の方形周溝墓が展開した可能性も考えられる。

土坑S K39(第14図) 調査地中央付近から検出した。規模は、1.2×0.8m、深さ約0.05mを測る。土坑中央から弥生時代中期の甕が、横たわった状態で出土した。甕の半分以上が後世の削平によって消失していた。甕は摩滅しており、図化できなかった。

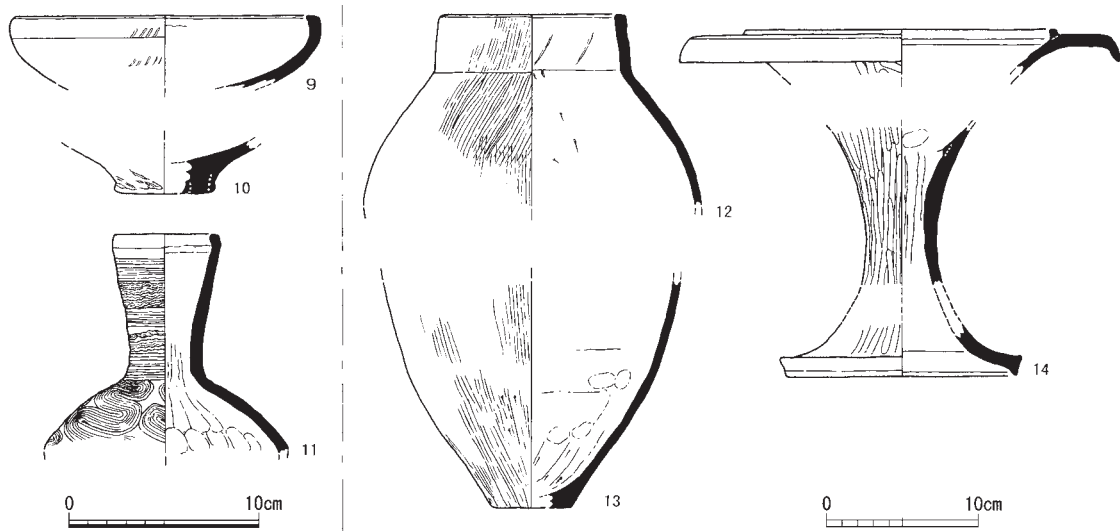
出土遺物(第13図) 9は、口縁部の平坦な鉢である。口縁部外面にヘラ状工具による圧痕が認められる。10は、底部の破片である。径5cmの円柱状の底部から大きく開く。11は、細頸壺である。頸部外面には直線文と波状文が交互に施され、体部外面には流水文が施される。8条を一単位として直線文や波状文、流水文が施される。12・13は、直口壺で、同一個体である。外面は



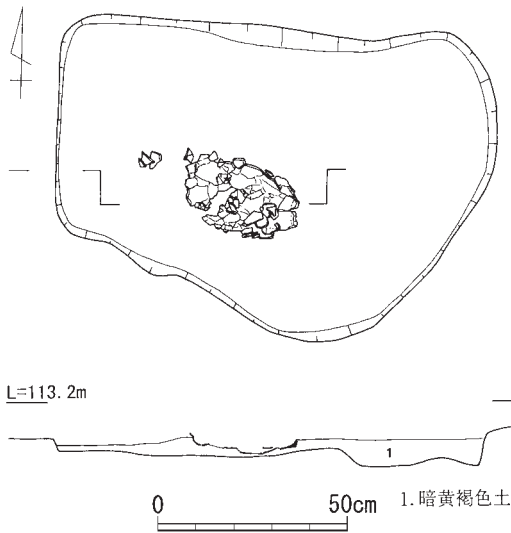
第11図 D-1・E-1地区遺構配置図



第12図 SD45実測図



第13図 出土遺物実測図(3)



第14図 SK39実測図

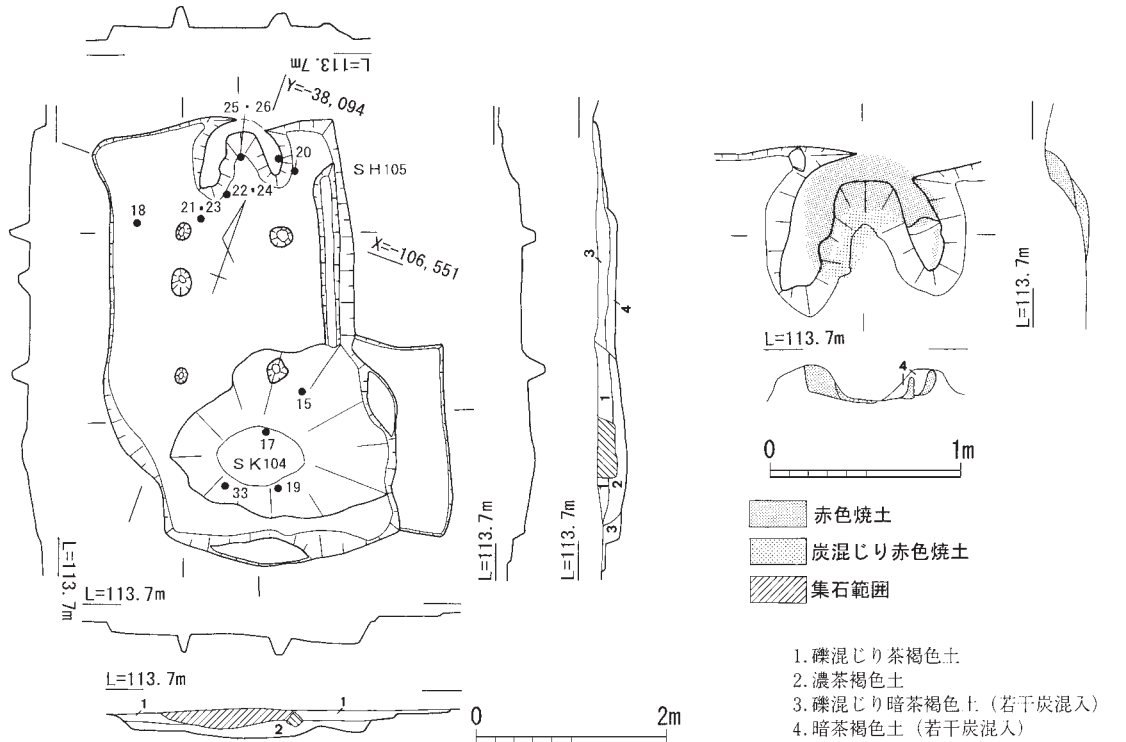
斜め方向のハケ調整を、体部内面はナデ調整を、底部内面にはヘラ削りが施される。14は、水平口縁をもつ高杯である。脚部外面には、縦方向のミガキが施される。脚端部は下方に尖る。

2) 飛鳥時代 この時期の遺構は、竪穴式住居跡 S H105である。

竪穴式住居跡 S H105 (第15図) 調査地北側で検出した。住居南側が奈良時代の土坑 S K104によって削平されていた。規模は、約2.6×3.6m、深さ約0.2m、N20° Wを測る。小規模な住居である。北辺中央に竈が付く。竈の規模は、1.0×0.9m、両袖間の内法は0.3mを測る。両袖部から竈中央にかけて赤色に焼けていた。東辺に幅約0.2m、深さ約0.04mの周壁溝を設ける。支柱穴は、中央よりの4か所から検出した。柱穴の規模は、径0.15~0.2m、深さ約0.2mを測る。住居北側から、須恵器杯(18・20)、土師器杯(21)・鍋(23)などが細片化した状態で出土した。また、竈の袖付近から土師器壺(22)が完形で出土し、燃焼部か

ら土師器甕の破片(24~26)が出土した。

出土遺物(第16図) 15は、須恵器蓋である。つまみは欠損する。天井部から口縁部にかけて緩やかに傾斜し、端部は下方を向く。16~18は平底の杯である。16・17の底部は、ヘラ切り後雑なナデ調整する。18は、器高の高い杯である。歪みが著しい。19・20は、底部縁部より内側に輪状



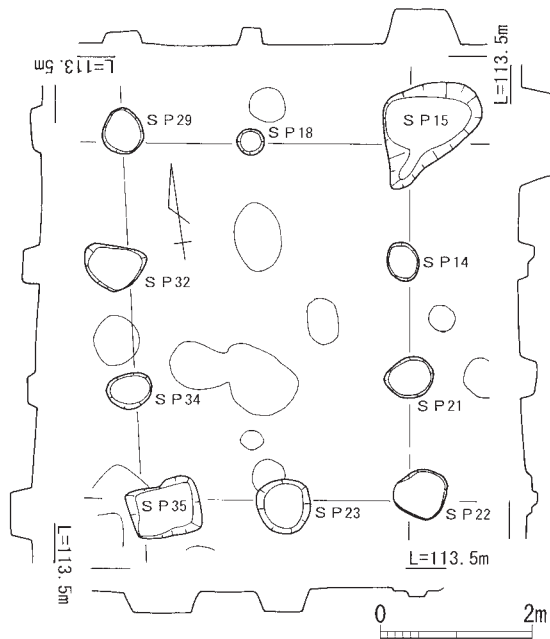
第15図 SH105・SK104実測図



第16図 出土遺物実測図(4)

の高台をめぐる須恵器杯である。21は、土師器皿である。底部内面には放射状に暗文が施される。口縁端部は外上方に尖る。22は、土師器甕である。体部外面には縦横に、口縁部内面は横方向のハケ調整を施す。体部は球形である。24~26は土師器甕である。外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整とナデ調整する。23は、土師器鍋である。口縁部は大きく外反する。外面と底部内面にハケ調整を施す。16は柱穴から、他はS H105から出土した。

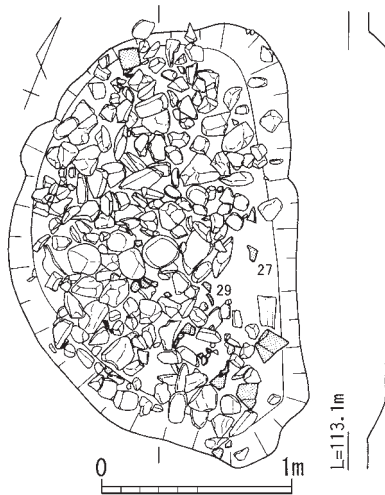
3)奈良~平安時代 この時期の遺構は、掘立柱建物跡S B14と土坑S K104・50と柱穴群である。



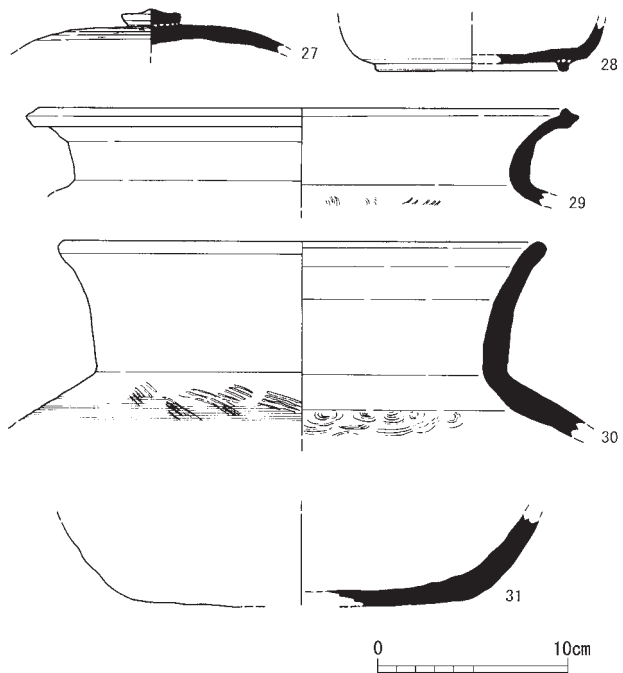
第17図 SB14実測図

掘立柱建物跡S B14(第17図) 調査地中央で検出した側柱建物である。規模は、2間(3.5m)×3間(4.7m)、N7°Eを測る。柱穴の掘形は、径0.3~0.7m、深さ0.1~0.3mを測る。ほ場整備に伴う発掘調査で、この付近から同様の建物群を検出しており、官衛的な施設が存在すると考えられている。S B14は、構成施設の1棟と思われる。

土坑S K104(第15図) S H105の南側を切る形で検出した。規模は、1.2×1.5m、深さ約0.3mを測る。すり鉢状に掘られた土坑は、S H105の床面を掘り込んでいた。暗茶褐色土の埋土とともに、拳大から人頭大の礫が多量に埋まっていた。その埋土中から須恵器蓋(15)・杯(17・



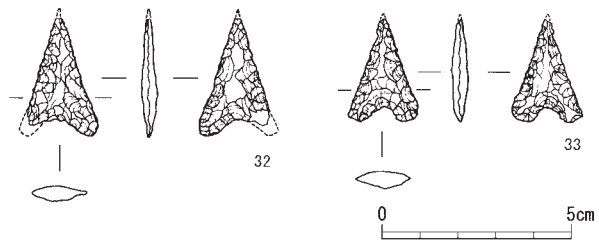
第18図 SK50実測図



第19図 出土遺物実測図(5)

19)が出土したことから、奈良時代とした。また、埋土に混入した状況で石鏃(33)が出土した。

土坑S K 50(第18図) 調査地西側で検出した。規模は、1.5×2.4m、深さ約0.1mを測る。暗茶褐色土の埋土とともに、拳大あるいは人頭大の礫が多量に埋まっていた。その中から須恵器蓋(27)・杯(28)・甕片(29～31)が出土した。性格については不明である。



第20図 出土遺物実測図(6)

出土遺物(第19図) 27は、須恵器蓋である。扁平なつまみが付く。28は、輪状の高台めぐらせる須恵器杯である。29～31は、須恵器甕である。

柱穴群(第11図) 調査地内から直径もしくは一辺が0.2～0.5mの柱穴が数多く検出できた。時期のわかる遺物としては、須恵器杯(16)であった。また、今回検出した柱穴群の中に、緑釉陶器が出土するものもあった。これは、当地区付近では希薄と思われていた奈良時代から平安時代後期にかけての遺構の存在を示唆するものである。

4) 縄文時代

縄文時代の遺構は検出されなかったが、整地層内や土坑埋土中から縄文土器・石器が出土した。

石器(第20図) 32は整地層内から、33はS K 104埋土内から出土した。いずれもサヌカイト製の凹基式鏃である。

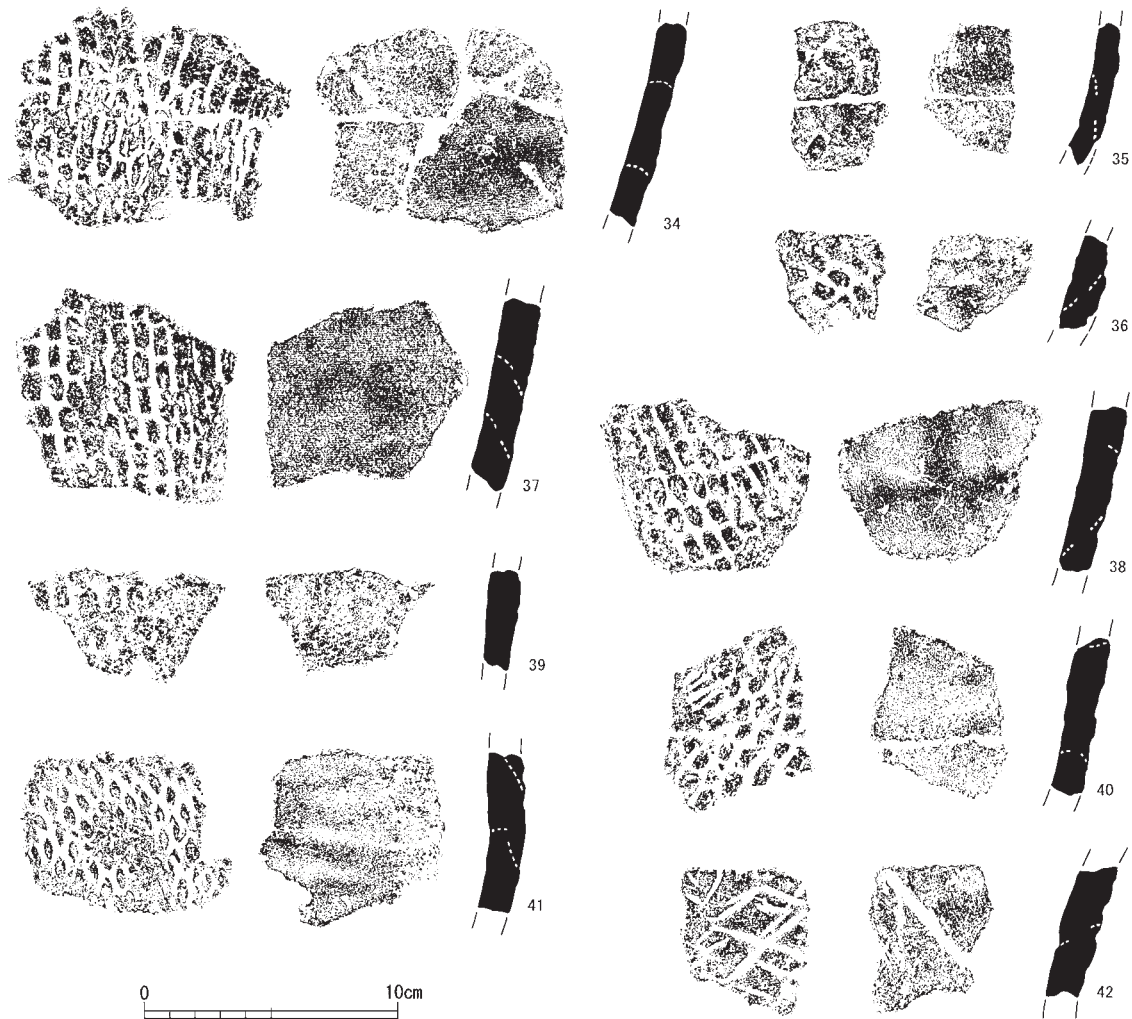
(岡崎研一)

縄文土器(第21図) D-1地区の整地層から、縄文土器が出土した。土器は、大きめの楕円と菱形をしている押型文で、内面に棒状工具による沈線を施していることから、縄文時代早期中葉の押型文を主文様とする高山寺式土器に比定できる。押型文は、丸棒に文様を彫り込み、器面に押しつけながら施文する文様である。出土土器の総数は十数点であるが、図示できた9点には押型文を施文している(34～41は楕円文、42は菱形文)。口縁部や底部といったものは出ておらず胴部片が主である。

34の楕円文の単位としては重複してはわかりにくいですが3単位であり、施文方向は右下がりである。楕円文の大きさは、長軸1.2cm、短軸0.8cm程度である。施文の切り合いは、明確ではないが上から下の順に施文しているのではないと思われる。内面は丁寧なナデ調整を施し、凹凸がほぼ確認できない。35は磨滅してわかりにくいですが、楕円文を施している。単位は確認できないが、施文方向は右下がりと考えられる。楕円文の大きさは、長軸1.1cm、短軸0.7cm程度である。内面はナデ調整を施す。36の文様の単位は表面の磨滅のため、2単位までは確認できた。施文方向は右下がりである。楕円文の大きさは、長軸で1.1cm、短軸で0.65cm程度である。内面はナデ調整を施すが多少粗い。37の文様の単位は3単位で、原体長が確認でき2.6cm程度である。施文方向は右下がりである。楕円文の大きさは、長軸で1.3cm、短軸で0.7cm程度である。内面は丁寧なナデ調整を行っている。38の文様の単位は3単位で、原体長が確認でき2.4cm程度である。

施文方向は右下がりである。楕円文の大きさは、長軸で1.25cm、短軸で0.7cmである。内面は丁寧なナデ調整を行うが、若干凹凸が見られる。39の文様の単位は磨滅のためわかりにくい、3単位である可能性が高い。施文方向は右下がりである。楕円文の大きさは、長軸1.2cm、短軸0.7cmである。内面はナデ調整を行っているが磨滅している。40の文様の単位はわかりにくい、3単位であると思われる。施文方向は右下がりである。楕円文の大きさは、長軸1.3cm、短軸で0.8cm程度である。内面はナデ調整を行っている。41は胴部の最も張るところであり、小ぶりの楕円文を施す。単位は3単位もしくはそれ以上であると考えられる。施文方向は右下がりである。楕円文の大きさは、長軸0.9cm、短軸0.55cmである。内面はナデ調整を行っており、部分的に強いナデが目立つ。42は菱形の押型文を施しており、頸部付近に位置する。単位・施文方向は不明である。菱形文の大きさは、長軸3.3cm、短軸2cmである。内面の沈線は0.6cmで、丸みを帯びているため棒状工具による施文であると考えられる。また右肩下がりに施文する。内面はナデ調整を行っている。

出土した土器の部位は胴部下半が主体であり、高山寺式に特徴的な内面沈線が少ないのはそこまで届いていないためと考えられる。内面はナデ調整であり、凹凸があまりなく丁寧である。押



第21図 出土遺物実測図(7)

型文は基本的に楕円文を呈しており、右下がりの施文方向である。単位は主に3単位で、およその原体長のわかるものもある。菱形文を呈する土器の沈線方向は、右下がりである。凸部の処理が行われていないことや、沈線の間隔がある程度離れていることから、高山寺式でも一番古い段階のものではないと考えられる。しかし他の土器の楕円文の単位や大きさ、41の楕円文が小粒で様相が異なることを考慮すると、多少時期幅があるのかもしれない。

(乾 茂年)

(3) E-1 地区(第11図)

D-1の北側に続く地区である。この地区から検出した遺構は、風倒木痕と柱穴群である。

1) 縄文時代 D-1地区の整地層から縄文土器が少量出土したが、この地区からの出土は数点のみである。D-1地区で見られた整地層はこの地区では薄くなり、後世の削平をかなり受けていると思われた。

風倒木痕 調査地南側から、木が倒れた際に大きく攪乱を受けた範囲が数か所で見つかった。南端から検出した風倒木痕の埋土中から、縄文時代早期の土器片が数点出土した。

2) 時期不明 調査地全域からまばらな状況で、柱穴を検出した。

柱穴群(第11図) 調査地内から径0.2m前後の柱穴を検出した。建物などの復原には至らなかった。

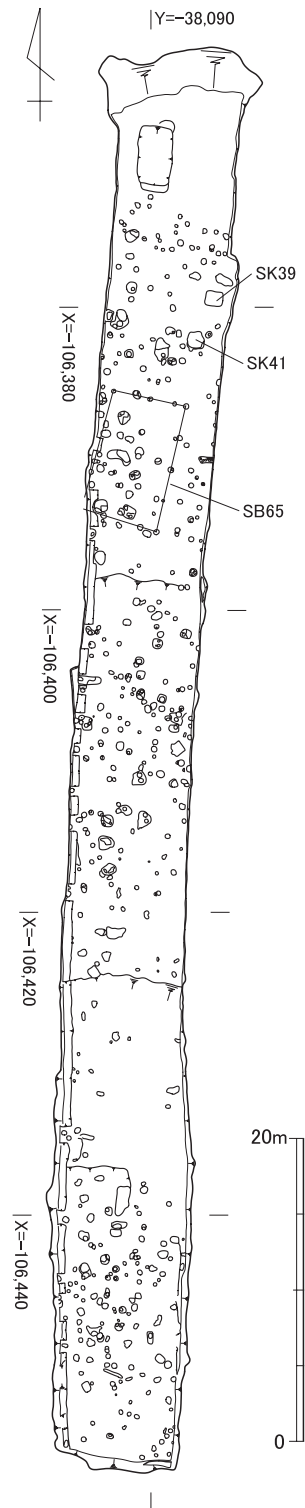
(4) G地区(第22図)

E-1地区北隣に位置する。この地区から検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟・土坑4基・柱穴群である。土坑については、土器や焼土などが認められたものについて報告する。

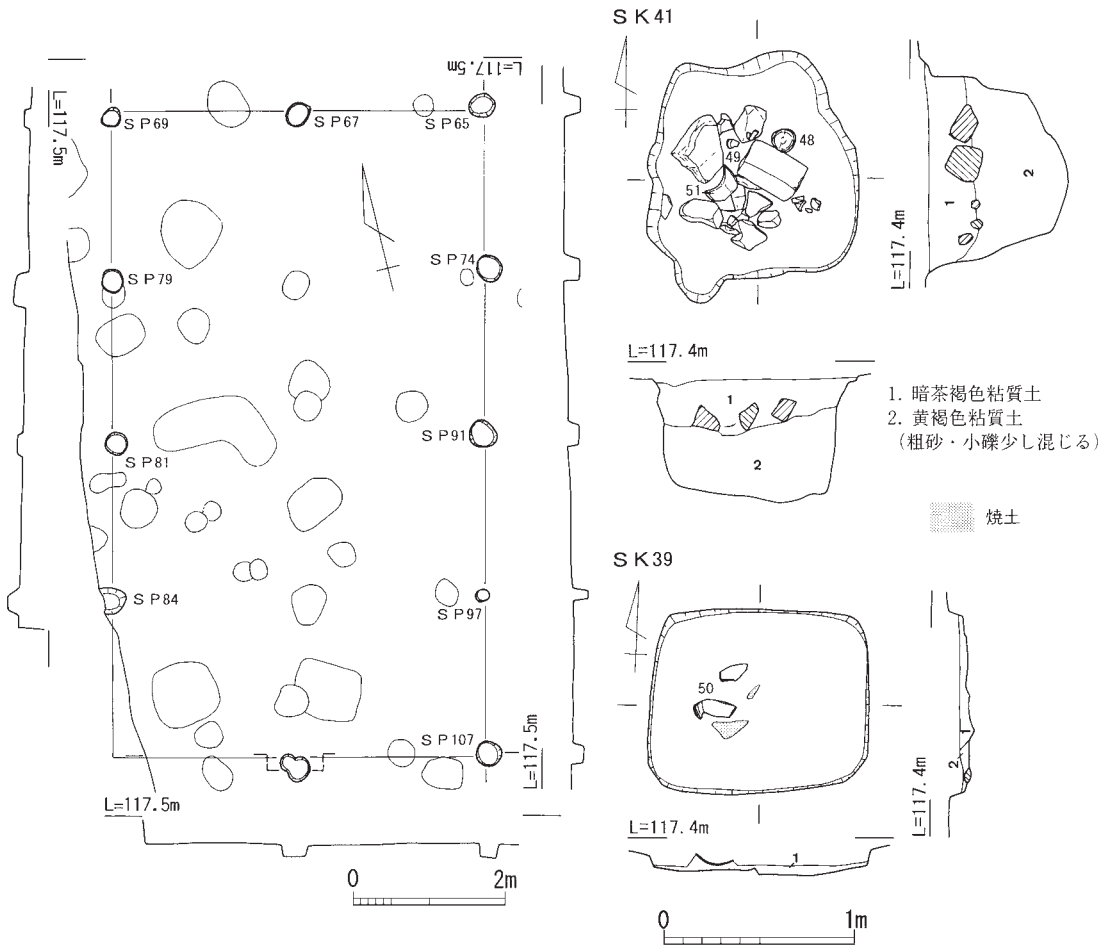
1) 中世 この時期の遺構は、掘立柱建物跡SB65と土坑SK41・39である。

掘立柱建物跡SB65(第23図) 調査地北側で検出した建物である。規模は、2間(4.9m)×4間(8.6m)、N14°Eを測る。柱穴は、径約0.3m、深さ約0.2mを測る。出土遺物はないが、D-1地区で検出した掘立柱建物跡と比べて、1間の長さが長く、柱穴の規模も小さい。また、ほ場整備事業に伴う発掘調査で、この付近からは瓦器や黒色土器などが出土する建物などがみつまっていることから、中世の建物と考えた。

土坑SK41(第24図上) 調査地北側、SB65の北約4mから検



第22図 G地区遺構配置図



第23図 SB65実測図

第24図 SK41・39実測図

出した。土坑の断面はU字形で、掘形の規模は、1m四方、深さ約0.6mを測る。埋土は、暗茶褐色粘質土であるが、下層には粗砂・小礫が混じる。水溜め場としての素掘り井戸の可能性もある。埋土上層から人頭大の石とともに瓦器碗(48)、白磁(49)と砥石(52)が出土した。

土坑SK39(第24図下) 調査地北側、SB65の北約7mから検出した。規模は、1.2×1.0m、深さ約0.1mを測る。部分的に焼土が認められた。

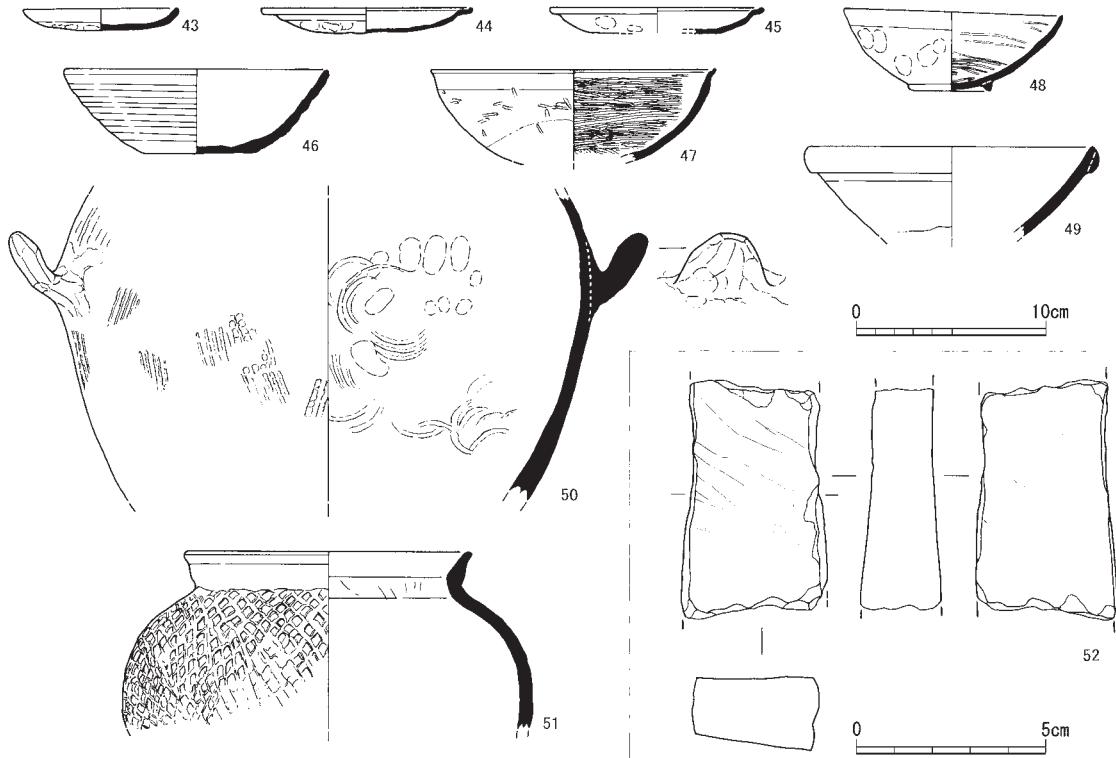
柱穴群(第22図) 調査地全域から、大小さまざまな柱穴を数多く検出した。出土遺物も少なく、時期不明のものが多い。

出土遺物(第25図) 柱穴出土の43~45は、土師器皿である。44・45は、「て」字状口縁を呈する。柱穴出土の46は、須恵器碗である。底部には、糸切り痕が残る。土坑状の落ち込みから出土した47とSK41出土の48は、瓦器碗である。47は、内面を緻密にミガキ調整する。48は、内面を粗くミガキ調整する。49は、中国製の白磁碗である。50は、甕である。51は、瓦質土器の甕である。外面を格子状に叩く。52は、砥石である。

4. まとめ

先行して実施された農地整備事業に伴う発掘調査によって判明したこと以外に、今回の調査で明らかになったことを列記する。

- ①当遺跡南側にあたるA地区は、段丘の縁辺部に位置するが、この一段低い段丘面からも弥生



第25図 出土遺物実測図(8)

時代中期の土器棺や飛鳥時代の竪穴式住居跡群を検出した。亀岡市教育委員会がE・G地区西側約200m付近の同じ地形から数多くの遺構を検出していることから、南方から西方にかけての段丘縁辺部にまで遺構が展開することが明らかとなった。

②A地区の土器棺に加え、D-1地区から弥生時代中期の土器を包含する溝が見つかり、方形周溝墓であることがわかった。周辺から出土遺物はなかったが同様に湾曲する溝が見つかり、この付近に弥生時代中期の墓域が展開することがわかった。

③D-1・E地区から縄文時代早期の押型文を施す土器がややまとまって出土した。整地層や埋土中からの出土であったが、早期の土器が出土した案察使遺跡が当遺跡南側に所在することを含めると、この付近に当時の遺跡が展開すると思われる、今回貴重な資料を得ることができた。

(岡崎研一)

注1 調査参加者(順不同)

調査補助員 天池佐栄子・田中奈津子・坂内裕志・安井蓉子・梅村大輔・谷上真由美・平田陽一・橋爪侑也・大黒浩二・魚谷典主・松浦仁宗・永井拓也・乾茂年・服部健太郎・関めぐみ

整理員 丸谷はま子・中島恵美子・井上聡・茶園矢壽子・清水友佳子・久米政代・春日満子・堀川多津子・高垣真代・岡田聡志

作業員 島津イト子・近藤正裕・広瀬秀夫・小泉正男・谷尻小ちゑ・安藤美智子・杉崎征夫・八木まゆみ・山田優・平野かすみ・橋本辰彦・西村真弓・岡本晴子・松田弘和・澤田勲・寺町義則・八木美代子・鴨井秋夫・田中康民・西田和則・野々村博子・安藤恵子・名倉勝・鴨井そと子・安藤恵利奈・中久保静夫

- 注2 村田和弘「2. 馬路遺跡第3次」『国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(平成15年度)発掘調査概報』(『京都府遺跡調査概報』第114冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2005
- 石崎善久「3. 三日市遺跡第3次」『国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(平成15年度)発掘調査概報』(『京都府遺跡調査概報』)第114冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2005
- 石崎善久ほか「1. 池尻遺跡第7次」『国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(平成16・17年度)発掘調査概報』(『京都府遺跡調査概報』)第123冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2007
- 引原茂治ほか「4. 車塚遺跡第7次」『国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(平成16・17年度)発掘調査概報』(『京都府遺跡調査概報』)第123冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2007
- 石崎善久ほか「蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群(I)」『国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(平成16・17・18年度)発掘調査報告』(『京都府遺跡調査概報』)第129冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2008

圖 版



(1) 蔵垣内遺跡全景(南上空から)



(2) A地区全景(上空から、左が北)



(1)D-1・E-1地区全景(上空から、右が北)



(2)G地区全景(上空から、左が北)

(1) A地区 S K358近景(南から)



(2) A地区 S K358近景
(上から、左上が北)



(3) A地区 S H327近景(南西から)





(1) A地区S H327竈近景
(南西から)



(2) A地区S H315近景(南東から)



(3) A地区S H315竈近景
(南西から)



(1) A 地区 S H328 近景 (南東から)



(2) A 地区 S H315 内遺物出土状況
(南東から)



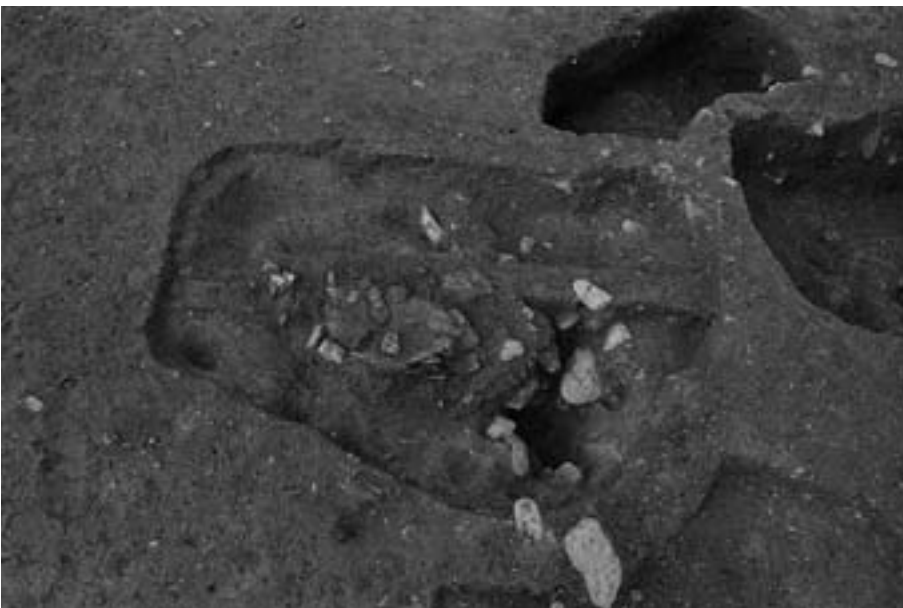
(3) A 地区 S H311 近景 (南から)



(1) D-1 地区 S D45 近景
(西から)



(2) D-1 地区 S D45 内
遺物出土状況(南西から)



(3) D-1 地区 S K39 近景
(南から)

(1) D-1 地区 S H105・S K104
近景(北東から)

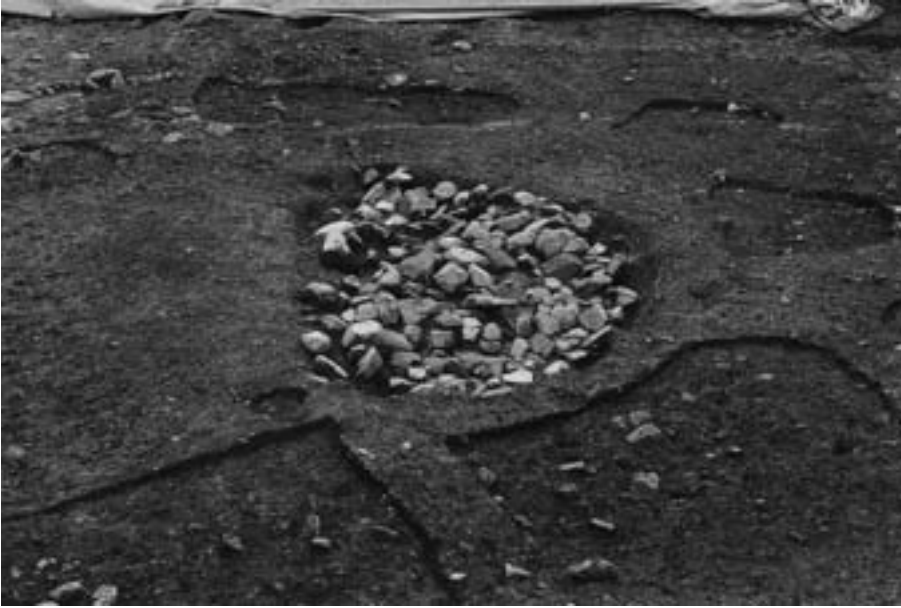


(2) D-1 地区 S H105竈近景
(南東から)



(3) D-1 地区 S B14近景
(南から)





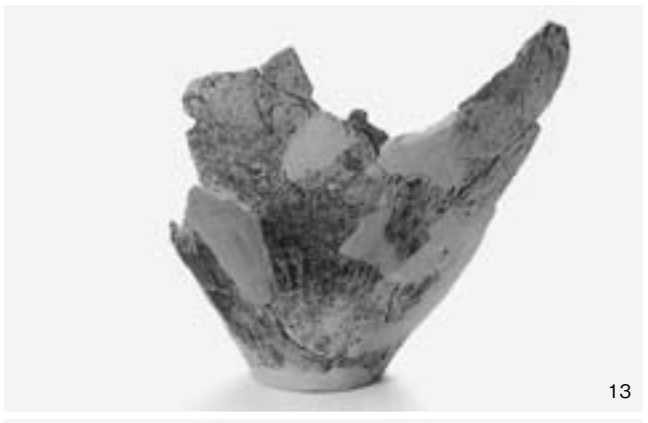
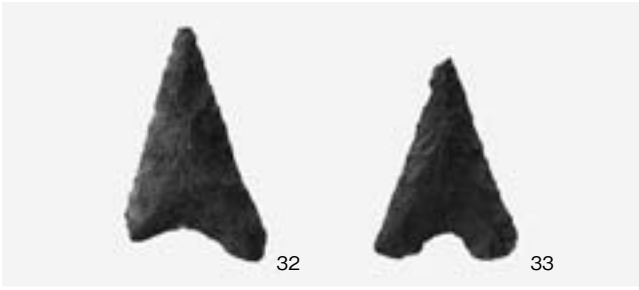
(1) D-1 地区 S K50 近景
(北西から)



(2) G 地区 S K41 近景(北から)



(3) G 地区 S K39 近景(南から)





京都府遺跡調査報告集 第133冊

平成21年 3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141